

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

### 論 文 題 目

## 日本語借用拘束形態素に関する認知言語学的研究

—フレーム意味論および構文形態論の観点から—

氏 名 HAMLITSCH Nathan Jesse

### 論 文 内 容 の 要 旨

日本語には、世界の諸言語と同様に、他言語からの言語表現の借用が多く存在する。古来、中国語は日本語にとって最大の借用語の提供言語であり、日本語は中国語から多量の文字や語彙、さらに文法形式を借用して自らの語彙・文法体系を豊かなものにしてきた。その後 16 世紀以来、日本語はポルトガル語とオランダ語、さらに明治時代（19 世紀後半）以降は他の欧州言語（ドイツ語、フランス語、英語など）からも借用を行ってきた。20 世紀半ば以降、日本語が引き続き多くの借用を続けている最大の借用もと言語は英語である（Hoffer 1980）。

本論文では、英語由来の借用語のうち、主に拘束形態素として使用されるものを扱った。借用語の形態論研究はそもそも一般に数が少なく、中でも拘束形態素に着目した研究は皆無に等しい（第 2 章）。本研究では、(1) - (3) に例示する[x-jakku（ジャック）]、[x-rosu（ロス）]、[x-taimu（タイム）]（-jakku 等のローマ字表記は後述する構文形態論の表記法による）という 3 つの借用拘束形態素を具体的な事例として扱った。

(1) 広告ジャック < (合法的に) 広告でどこか (電車や駅など) を占有すること >

(2) 逃げ恥ロス <「逃げるは恥だが役に立つ」というテレビドラマが最終回を迎え、喪失感を抱くこと>

(3) 親子タイム <親子が何か楽しい交流活動をする事>

理論的枠組みとしては、「構文形態論」と「フレーム意味論」という認知言語学的な枠組みを採用した(第3章)。構文形態論(Booij 2010)に基づくと、[x-jakku]、[x-rosu]、[x-taimu]はいずれも「形態的構文」(語レベルにおける形式と意味の対)と考えられる。本研究では、これらの構文について以下のリサーチクエスチョンに取り組んだ。

1) 日本語に借用された(1)～(3)の拘束形態素は日本語でどのような構文ネットワークを示すか。

2) 文化的フレームは日本語における借用拘束形態素の構文ネットワークにどのように貢献しているのか。

第4～6章における事例研究の成果は以下の通りである。まず、[x-jakku]構文のネットワークは、3つの意味拡張を軸としていることを指摘した。1つ目は、特に「電波ジャック」という特定の表現の多義性(<違法な電波妨害>、<宣伝活動のための電波占有>)を介した構文レベルのメタファー拡張である。2つ目は、日本の電車に関する百科事典的知識(《日本の電車》フレーム)に基づく「(ポスターで)電車ジャック」→「(電車を)ポスタージャック」のようなメトニミー的拡張(ないし範列的(paradigmatic)な構文交替)である。3つ目は、「ママ集団が(お喋りで)披露宴ジャックをする」のように、「ハイジャック」という違法なテロ行為から合法的な占拠へと意味が発展するメタファー拡張である。このメタファー拡張の例は誇張表現の一種と考えられ、ユーモラスな響きを持つのが特徴である。

[x-rosu]構文は、2つのメタファー拡張と1つのメトニミー拡張を見せることを指摘した。1つ目のメタファー拡張は、<死を介して誰かを失うこと>(例:「ペットロス」から<親しい誰かを心理的に失うこと>(例:「実家にも行けないから、おかあさんが孫ロスになるんじゃないのか?」)への拡張である。この拡張は、《日本の子育て》フレームに位置づけられるとともに、《日本の結婚》フレームおよび《日本のファン》フ

レームにおける同構文の使用も動機づけている（例：人気のある俳優である玉木宏に由来する「玉木ロス」）。この拡張義においては、さらに「(引退による) 安室ロス」から「(安室奈美恵の) 引退ロス」のようなメトニミー拡張（ないし範列的な構文交替）も確認される。2つ目のメタファー拡張は、＜心理的に親しい誰かを失うこと＞から＜心理的に親しいものを失うこと＞への拡張であり、これにはしばしば《日本のファン》フレームが関与する（例：「あまちゃんロス」＜放映終了とともに「あまちゃん」というテレビ番組を失うこと＞）。

[x-taimu]構文については、メタファー拡張が確認されない一方で、3つの文化的フレームの関与が見られた。そのフレームとは、《日本の家族・子供に関する活動》フレーム（例：「親子タイム」）、《プライベートの時間》フレーム（例：「入浴タイム」）、および《日本の食事》フレーム（例：「おやつタイム」）であり、これらはメトニミー的に関係付けられる領域マトリックスをなすものと考えられる。

さらに、第7章では、これらの構文ネットワークに意味拡張が生じる過程とその理由を詳しく論じた。具体的には、文化的フレーム、百科事典的知識、およびそれらのメタファー的およびメトニミー的意味拡張の3者間の関係について、これらの構文がどのように意味を得るかという問いに答えた。すなわち、「発話のための思考 (thinking for speaking)」および心理学の分野における「フォアラー効果 (the Forer effect)」および「自己奉仕バイアス (self-serving bias)」という概念を援用し、借用拘束形態素の構文ネットワークが上述のような様相を呈する理論的根拠を提示した。

これらの借用語とその構文ネットワークには本研究で扱った以外の特徴があるかもしれないが、その解明は今後の研究を待ちたい。また、本研究では英語から借用された3つの借用拘束形態素について詳細に分析したが、将来的には、借用拘束形態素の構文の一般的特性がより明確になることが期待される。